〇浄瑠璃寺境内

寺伝によれば、行基（668～749年）が和銅元年（708年）に布教のためにこの地を訪れ、仏法を修行する適地として伽藍を建立し、白檀の木で薬師如来像を掘って本尊とし、薬師如来がいる瑠璃光浄土から「浄瑠璃寺」とし、医王如来に因んで「医王山」と山号を定めたとされています。大同２年（807年）に、唐から帰朝した空海（774～835年、921年諡号「弘法大師」）がこの寺に留まり、荒廃した伽藍を修復したとされています。室町時代の末期には、伊予守護河野氏の重臣で地元の豪族平岡通倚（ひらおかみちより）（生没年不詳）が寺塔を再興し、江戸時代中期には堯音（ぎょうおん）（1732～1820年）が本堂等の諸堂を再興し、現在に至っています。

浄瑠璃寺本堂

〇浄土寺境内

寺伝によれば、天平勝宝年間（749～757年）に孝謙天皇（在位749～758年）の勅願寺として、恵明上人（生没年不詳）により行基（668～749年）が彫像した釈迦如来像を本尊として祀り、開創された後、空海がこの寺を訪ねて、荒廃した伽藍を再興し、法相宗の寺院だったのを真言宗の寺院としたとされています。10世紀中頃には、空也上人（903～972年）が四国を巡歴し、天徳年間（957～961年）に３年間滞留し、村人たちへの教化に努めたとされています。建久３年（1192年）源頼朝が一門の繁栄を祈願して堂塔を修復しますが、応永23年（1416年）の兵火によって焼失したとされています。文明年間（1469～1487年）に河野通宣（みちのぶ）（生年不詳～1519年）によって本堂が再建され、その後、大師堂などを徐々に復興し現在に至っています。

浄土寺本堂